

潮来市立日の出中学校 三年

## 真の友情

根<sup>ね</sup>本<sup>もと</sup>泰<sup>たい</sup>誠<sup>せい</sup>

「君は例え日本と中国が戦争をしたとしても、僕と友達で居続けてくれる？」中国人の僕の親友が転校する前に言った言葉です。僕は「当たり前だろ。」と返しました。そのときの彼の微笑みは今でも忘れられません。彼は僕らと同じ空間で共に成長してきたのに、ただ国籍が違うというだけで、常に不安な気持ちを抱いていたのだなど、そのとき初めて気が付きました。

昨年度の二月二十四日、ロシアによる武力でのウクライナ侵攻が始まりました。僕は今でもあの日を鮮明に覚えています。誰もがこの悲惨な出来事を忘れはしないでしよう。戦争が行われる中、僕はウクライナ出身のとあるユーチューバーの動画を見ました。ロシアへの怒りと悲しみであふれかえっていました。しかし、そのユーチューバーは

こう言ったのです。「僕のロシア人の友達も戦争を望んでいない。ロシア人の友達が僕に謝る姿をもう見たくない。」僕はその時、胸が締めつけられました。なぜ国の問題のせいで友人が不安と申し訳ない気持ちにならなくてはいけないのだろうと僕は怒りと疑問を抱きました。そのとき、僕の親友が転校する前に言った言葉の意味が分かった気がしました。彼はこのような状況を心配し、ずっと恐れて生きてきたのだなど。戦争をするということは、国の責任を自分の責任と考える必要があるのでと改めて感じました。

彼の転校からは一年と半年がたち、今ではお互い受験生となりました。彼との連絡を取る頻度も日に日に減り、彼の言葉を忘れかけていました。そんな中、社会の单元が満州事変と日中戦争に入りました。過去の单元で起こった戦

争とは違い、明らかに日本に非があると僕は感じました。だから僕は、親友はどんな気持ちでこの単元を学習しているのだろうかと考え、彼の母国の中国が僕らの母国の日本に理不尽に攻められていることに対して僕は申し訳ない気持ちになりました。そのときに、戦争が例え過去の出来事であっても、いつまでも次世代へとその責任を受け継いでいなくてはならないと感じました。

僕は久々に親友にメールを送ることにしました。内容は、日中戦争を学習して申し訳ない気持ちになったということを送りました。送ってから二日後位に彼からの返信が届きました。「僕もこの単元を学習して君のことを考えていたよ。責任感の強い君ならきっとそう考えるんじゃないかと思った。だけど君が責任を感じて僕に謝る必要はないよ。僕と君の母国が戦争をしたという事実は変わらず、互いに責任を持って生きていくことは大切だけど、僕と君がケンカした訳じゃないんだから、謝るのはおかしいよ笑。」彼にしては珍しく返信が遅く、長文で返信が返ってきました。僕が傷つかないように時間をかけて考えてくれたことが伝わってきました。僕はそんな親友が大好きです。戦争犯罪という大きな問題を国籍の違う二人だからこそ別視点から考えることができ、意見を交換し合い納得を共に深められ

る「友」に出会えて本当に良かったです。

彼の言葉が無ければ、僕たちは一生不安を抱いて生きていくことになっていたと思います。共に話しづらかった自分の母国と友人の母国の戦争について正面から互いに向き合うことで、もやもやしていた感情が晴れ、また、僕らだけでなく、多くの同じ境遇の人達にも「戦争」についてしっかりと正面から向き合ってほしいなと思いました。真の友情とは、国際問題にも勝り、国境を越えるものであると心から確信しました。

今後も、戦争問題だけに関わらず、国を越えた関係である限り、母国の責任を背負って共に生きていくということを大切にし、多くの人々にこのことを伝えていけたらいいなと思います。

